「論文作成」のための特別講座 練習問題 15

次の資料をよく読んで、印象に残ったところをあげて、あなたが考えることを500字以上、600字以内で作文しなさい。ただし、作文には、「共に生きる」、「障害」、「学ぶ」の3つの言葉を必ず使用すること。

【資料】

心のシーソー

神奈川県相模原市 ^{さがみはら}相模原中央支援学校高等部三年

保田 健太

人は一生の中で、どれだけの人と出会うのだろうか。そのうち、失いたくない大切な人に何人出逢えるだろう。

そして、その出逢いが新しい光となって明日が見えてくることもある。僕は、大人とか子供とか、健常者とか障害者とか関係なく”信じる心“を教えてくれた先生に出逢えた。先生は僕の光となった。

僕は全身の運動麻痺という障害を抱え生きている。生まれた時は「一生話すことも自分で何かすることもできない。」と医者に言われた。確かに、健常者が成長と共に自然にできる全ての動作を、訓練で獲得するしかない。それは途轍もなく難しい挑戦だった。指一本動かすにも、関連のある機能を全て訓練しなければ、きちんと動くようにはならない。同じ動作を毎日毎日、何年もかけてやっと少し動くようになる。それが全身なのだから気が遠くなる。それでも母も僕も諦めなかった。

悪戦苦闘の日々は続いたが、小学校入学時には、ゆっくり話すことができるようになった。書くことはまだできなかったが、文字や数の知識は身につけられた。食事も目の前に置いてもらえれば、自分で食べられるようになった。そして僕は、先生や友達の支えによって、小・中学校はエレベーターのある普通校に通い、みんなと一緒に勉強し、かけがえのない時を過ごした。とても厳しく悔しいこともたくさんあったが、楽しい九年間だった。

高校は、主要教科と将来の自立に力を入れようと養護を選択した。ここで出逢った担任の先生が僕の光となった。養護学校卒業後は、職業能力開発校に入りパソコンの技術を高め、IT関連の会社に入社するのが夢だった。設備の整った会社でなければ無理だし、責任を持った仕事をやりたいという野望もあったからだ。でも、学校生活には馴染めなかったし納得もできなかった。時間の流れが新幹線と自転車くらい違う。「やっぱり普通校にすれば良かった。これからどうすればいいんだ。」と拳を握りしめたけれど、居場所がない孤独感とみじめさで涙が止まらなかった。

五月の連休前、ある先生に「保田君は身の回りの自立ができていないんだから、勉強なんかしてる場合じゃないだろう。」と頭ごなしに言われた。悔しくて朝まで母と話した。連休明け、重苦しい気持ちで登校すると、担任の先生がいつもと変わらない笑顔で「今日からまた一緒に頑張ろうね。」と迎えてくれた。僕は先生に連休前の辛い出来事を話した。先生は空き部屋に連れて行ってきて「それは辛かったね。よく我慢したね。でも、その先生も情報不足だっただけで、

保田君のことを考えて言った言葉だと思うよ。とにかく、将来のことを真剣に考えて立てた目標だから頑張ろうよ。^{あきら}諦めないで一つひとつ積み重ねていけば、きつと壁は越えられる。一緒に頑張ろう。」と僕の目をしっかり見て話してくれた。養護に入学して初めて”この先生を信じてみよう“という気持ちが僕の中に生まれた。それからは、先生が僕の想いを他の先生方に伝えてくれて、一学期が終わる頃にはたくさんの先生と楽しく関われるようになった。その後、僕の提案でみんなにアンケートをとり、みんなの想いを僕が詩にして先生が曲を作り、学年曲として歌ったりもした。僕は先生のピアノを聞くと心が真っ白になる。優しく、力強く「大丈夫だよ。」の言葉みたいで、また一歩踏み出せる。二学期は自立に向け、電動車椅子の練習もほぼ毎日行った。学習内容が合わないと相談した時も、受験用の問題集を用意してくれて「自分も忘れていところがあるので、保田君と一緒に勉強します。」と言ってくれた。後で聞いた話だが、母が相談した時も「自分は上手く指導する自信がないので、とことん本人を信じます。そこから一緒に考えていきます。」と先生は言ったそうだ。

一番嬉しかったのは僕が作文で賞を受賞した時、誰より喜んでくれて「保田君の晴れ舞台を見たいので、自分も表彰式に行きたいです。」と校長先生に申し出てくれた時だ。先生と一緒に参加した表彰式は一生忘れられない。

僕はこの先生と接する中で、障害の有無は関係ないということ強く感じた。例えば、相手の良いところや優れているところをそのまま認めることや、自分の知らないことや失敗を素直に認める謙虚さ。^{けんきよ}例えば、できることを前提として前向きに物事を導くことや、悪いことや失敗を決めつけずに解決策と一緒に考える姿勢だ。僕は決して優等生ではなかったし、逆に先生を困らせた問題児だった。全てが上手くいかない時、本意でないことばかり口にしたり、嘘をついてしまったこともある。そんな時も先生は、そこへ至った原因に目を向け、僕の話聞いてくれた上で解決策と一緒に考えてくれた。僕は自分の想いの丈を先生にぶつけることで、心の中に眠っていた本当の自分と向き合うことができた。ありのままの弱さを吐き出したら、決して強くはないけれど、弱くもない自分に出逢えた。

現在僕は三年で、越えれば越えるほど壁は高く厚くなることに愕然としてい。^{がくぜん}ただ、何が正しい道なのか誰にも分らないし、通り過ぎて答えが見えることはあるけれど幸せの近道などない。だから、僕を信じてくれた先生のことを胸に刻み、明日へ続く今日を精一杯生きようと思っている。

近年では、日本でも”共生社会“について真剣に思考を巡らせているが、障害者であるが故に、理解し合えず擦れ違^すう人間関係は未だに珍しくない。それは、健常者も障害者も両方、心の根底に「障害」を意識し過ぎるからではないだろうか。人と人が触れ合う中で生まれてくる優しさや絆は、お互いに幸せを感じ合える大切な瞬間だ。誰かを笑顔にすることで生きる力が湧いてきたり、一粒の涙で一歩踏み出す勇気をもらえたりする。だから、僕はできるだけ多くの人と向かい合って動かしてみたい！ 誰もが必ず持っている一人ひとりの「心のシーソー」を!!

原典：内閣府「心の輪を広げる体験作文入賞作品」平成24年度入賞作品集 pp. 62-64より
原典には、読みがなはない。学習のために倉橋が読みがなを付けた。

「論文作成」のための特別講座 練習問題15 解説

資料読み取り型の作文問題である。資料の中からメッセージを読み取って、そのメッセージ(問題提起)に対して、自分の意見を説明することが求められている作文問題である。

ただし、作文には、「共に生きる」、「障害」、「学ぶ」の3つの言葉を必ず使用することが求められている。

書き方の公式は、標準的な「資料読みとり型小論文」の構成(段落構成)を使えばよい。

第1段 資料文からの「引用」

第2段 「問題提起」＋「判断」

第3段 「根拠」

「答案」を書くテクニック

第1段の「引用」の場面で、論じる対象を明確に示えること。たとえ、長文でもかまわないので、正確に文を写すことが基本である(勝手に省略したり、言い換ええないこと)。

そして、とりあげた段落のメッセージについて「自分はどの受け止めるのか」を書くことが大切である。

第2段で、「問題提起」として、自分は障害者に対してどんなイメージを持っていたのかを説明すること。そのイメージが「心のシーソー」の作者の思いとどのように違ったのか。あるいは、自分の経験と同じように感じ取ることが出来たのか。「心のシーソー」を読んで自分の生き方や、障害者に対する意識について新たに感じたことを説明する。

次に、これから自分がしなければならないとか、したいことを「共に生きる」や「障害」との関係で自分の思いを書くことが大切である。

第3段では、「共に生きる」ために、自分が今後に取り組むべき方法を具体的に説明すること。その際、今の自分のできることに、将来身につけたい力量・知識・技術との間の距離を説明し、自分の「学ぶ」課題を明らかにできれば高い評価が与えられるであろう。

※ 採点基準

個人の「人生感」を採点することはできない。したがって、何を生き甲斐と感じるかなどの内容そのものを採点対象にはしない。

しかし、「課題設定力」と「表現力」及び「論理力」は、採点対象とすることができる。この問題の採点基準は、10点満点として考えると次のような配点になる。

- ① 「心のシーソー」が伝えるメッセージ(障害を克服する戦いの厳しき、支援してくれる人への感謝、共に生きたいという願い)を説明している。(2点)
  - ② 障害者と周囲の人達とのつながりについて、「心のシーソー」を読む前と読んだ後の自分の考え方の変化などについて具体的に書いている。(2点)
  - ③ 自分の克服すべき課題を、「共に生きる」「学ぶ」を使って説明している。(2点)
- 以上の①～③を書いていることと、指定の文字数で書いていることが最低条件である。

次に、加点対象として、

- ④ 自分の目指す「共に生きる」方法について具体性がある。(2点)
  - ⑤ キーワード(生き甲斐、社会参加など)を効果的に使用して、説明している。(2点)
- これら以外に、論理矛盾は、減点対象とされるので要注意である。